



TITLE:

身体名詞の意味拡張による空間的
用法について: 日本語「脇」が表す
空間の曖昧性を中心に

AUTHOR(S):

安, 在珉

CITATION:

安, 在珉. 身体名詞の意味拡張による空間的用法について: 日本語「脇」が表す空間の曖昧性を中心に. 言語科学論集 2012, 18: 67-82

ISSUE DATE:

2012-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/173560>

RIGHT:

身体名詞の意味拡張による空間的用法について

—日本語「脇」が表す空間の曖昧性を中心に—

アン ジェミン

京都大学大学院

ajm0829@yahoo.co.jp

1. はじめに

空間を認知する能力は、生存に欠かせない最も重要な能力の一つであるといえる。その空間認知能力の基本となるのはモノの位置関係を把握することであり、幼児は「どこかに何かが存在する」という簡単な情報から、成長と共に比較的複雑なモノ同士の位置関係や動きなどの情報も把握することができるようになる。このような空間的情報は様々な形で言語表現に盛り込まれているが、たとえ物理的に全く同じ空間であるとしても、認知主体がその空間をどのように捉えているのかによって言語表現は変わり、当然モノ同士の位置関係を表す表現も変わってくる。

モノ同士の位置関係を言語化するときに用いられる空間指示枠 (Frames of Reference) の種類としてよく知られているのが、Levinson (1996) による「絶対的 (absolute) 指示枠」「相対的 (relative) 指示枠」「固有的 (intrinsic) 指示枠」の分類である。特定の言語の話者はこれらの分類のいずれかに基づいた方法で位置関係を言語化しているわけだが、言語によって3つの方法全てを用いる言語もあれば、1つだけを用いる言語も存在する。日本語は主に「左・右」のような相対的指示枠を用いる言語であるとされ、場合によってはモノの形に基づく身体名詞のような固有的指示枠が用いられることもある。そして限られた文脈においてだけ「東西南北」のような絶対的指示枠が用いられるとされる。

本稿で取り上げるのは、日本語の固有的指示枠、なかでも身体名詞である「脇」の空間的用法である。日本語は基本的には相対的指示枠中心の言語であるが、日常会話で「バスのお尻に広告が付いている」「富士山の頭に雲の白い筋が見える」といった位置関係表現に身体名詞が使われた表現を耳にするのはさほど珍しいことではない。しかしこのような位置関係表現は完全に定着して広く使われているとは言い難いのに対し、身体名詞「脇」だけはかなり文法化が進み、本来の意味から拡張された独立した空間名詞としての役割を担っている。

本稿では、モノ同士の位置関係を言語化する際に用いられるLevinsonの3つの

方略を概観して空間名詞としての「脇」の方略的特徴を確認した上で、意味拡張によって空間的位置に関する意味を得た「脇」の特徴について考察する。そしてその意味に曖昧性をもたらす解釈の問題、つまり「脇」が表す空間にかかわる認知主体の捉え方を探っていく。

2. 位置関係を言語化する方略

本節では位置関係を言語化する際に用いられる Levinson (1996) の3つの指示枠について、井上 (1998: 24-27) にまとめられている内容を中心に概観して空間名詞としての「脇」の方略的特徴を考察する。そして Kim (2006) による日本語空間名詞の分類を批判的に検討し、その問題点を踏まえた上で本稿の分析的枠組みへの手掛かりとして提示することにする。

まず位置関係を言語化する方略として Levinson (1996) は3つの指示枠を提示しているが、井上 (1998: 24-27) ではその3つの方略について以下のようにまとめている。

<相対的指示枠>

「左」「右」の表現のように、視点、指示対象物、支持基準点の3者関係に指示枠を置いた方法。まず、1か所に視点を置き、その視点とは異なる指示対象物（図）と指示基準点（地）を座標軸として押さえる。視点は、別に話者に限られなくてもよいが、誰かしら人間であるので、その人間の身体の中心に原点Xが位置し、上下、前後、左右の方向軸が定まることになる。

<絶対的指示枠>

相対的指示枠が動くものであるのに対し、地球上でまず重力と磁場が動かないと考えて、羅針盤の方位に相当する絶対的な方角を設定する方法。東西南北が代表的な例である。この指示枠では、視点や話者の向きなどに一切かわりなく、指示対象物（図）と指示基準点（地）の2者のみを不動の座標軸に据えればよいので、非常に簡潔な空間把握方法である。「バットはベースの東にある」といったら、誰から見てもその2つのものの位置関係ははっきりしていることになる。

しかし、実際の日常生活で絶対的指示枠を用いるためには、常に自分が東西南北といった座標軸のどこにいるのかを把握しておく必要があり、これはかなり大変な作業であるように思われる。

<固有的指示枠>

固有的指示枠とは、モノが座標軸の中心点となるような場合である。その

「モノ」には明らかに何らかの特徴が備わっている、あるいは状況に応じてそうした特徴に意味があるということを人々が学び、結果としてその特徴を基準に方向を決定する方法である。例えば「テレビ」というものは画面があるほうが「顔」だから「前」だし、「自転車」は進行方向がやはり「顔」といえるから「前」と、日本語では表現する。この場合、どちらも物体の機能性に基づいた特徴を手掛かりとして方向を決定している。しかし、機能性より形の特徴を重視する場合もある。

(井上1998: 24-27、例文等一部省略)

以上で位置関係を表す際に用いられるLevinsonの3つの指示枠を概観したが、空間名詞としての「脇」はモノの特徴に基づいた固有的指示枠の1つであるといえる。「脇」のように人間や動物の身体名称から拡張された用法は言語普遍的に多く見られる指示枠であり、固有的指示枠のなかで最も種類の多い用法であるとされる。世界中の言語のなかではこの身体の特徴に基づいた指示枠だけを用いる言語も存在しており、例えばメキシコのミシュテック語はモノの位置関係を言語化するとき「猫はマットの上にいる」という表現を「猫はマットの顔にいる」、「屋根の上に人がいる」は「家の背中に人がいる」のように、日本語では上と下という相対的指示枠で表現するところを全て身体部位に由来する言葉で表現する (cf. 今井 2010: 52)。これは身体全体のなかで、ある特定の部位がどのような物理的特徴を持って存在するのかという問題とも深く関わっており、全体についての部分のあり方を人間がどのように捉えているのかという問題に直結する。本稿の後半でも述べることになるが、「脇」という日本語も当然元々身体部位を表す言葉であることから、身体全体において脇という部位が持っている物理的特徴が、拡張された空間的意味にも反映されていると思われる。

以上でLevinsonの3つの指示枠に基づいた空間名詞「脇」の方略的特徴を考察したが、Kim (2006) では日本語の空間名詞を「まえ、うしろ、うえ、した、みぎ、ひだり」などの方向指示と「そと、となり、はし、わき、なか」などの領域指示に分けており、Levinsonによる3つの分類はあくまでも方向指示の尺度であって領域指示の尺度としては認められないと述べられている。Kim (2006) の分類において、方向指示とは1次元的位置関係を意味し、領域指示とは2次元・3次元的位置関係を意味する。Kimの分類だと空間名詞「脇」は領域指示にあたるため、固有的指示枠として分類することはできないということになるが、この分類の方法は曖昧で恣意的であるように思われる。なぜならば、実際に方向指示と領域指示を明確に区別するのは不可能である上に、空間名詞そのものに方向指示または領域指示という特徴を付与するのは話者の捉え方を排除するアプローチになってしまうからである。たとえば「まえ、うしろ」などを方向指示として挙げているが、

これらの名詞は点と点を繋ぐ直線を表すわけではない。「まえ、うしろ」などで表される空間は概念化者にとって常に幅（領域）を持った状態、つまり2・3次元的な状態で存在し、ターゲットとなる対象物がその幅の範囲内に位置さえすれば「まえ」または「うしろ」として認められる。簡単な例を挙げると「テレビの前」は常に少なくともテレビという参照点の正面の横幅以上の領域を指す。このような指摘は Kim (2006) で方向指示として挙げられている「うしろ、うえ、した、みぎ、ひだり」などの空間名詞にもあてはまる。領域指示として挙げられている「そと、となり、はし、わき、なか」などと比べると、方向指示の方が比較的分散的で狭い領域を表す傾向があるのは確かであるが、あくまでも領域のレベルで考えるべきであって、明確に両者を区別するのは文脈と概念化者の捉え方を排除した分析方法になりかねない。どちらかと言うと「比較的狭い領域を表すため、結果的に方向指示に有利な空間的特徴を有するようになった」という分析の方が合理的であろう。また Kim (2006) は、領域指示をさらに「そと、となり、そば」の外部領域指示、「さき、はし、へり、ふち、すみ、かど、わき、よこ」の境界領域指示、そして「なか、うち、おく」の内部領域指示に分けている。外部領域指示と内部領域指示はそれぞれ参照点の外部と内部の領域を指示する方法、境界領域指示は参照点の内部領域と外部領域が接している境界線を利用する指示方法として定義しているが、この分類もかなり曖昧なところがあるように思われる。これは本稿の主な分析にも繋がる内容であるが、上で述べた空間名詞そのものに外部・境界・内部領域を指示する特徴があるというアプローチは、概念化者の捉え方という要素を排除した分析になりかねない。たとえば「バスの後ろにいる」という表現は少なくとも「バスの内側の後ろの座席にいる」という解釈と「バスの外側の後ろにいる」という解釈、つまりバスという参照点の枠（境界線）をまたぐ2つの解釈が可能となるわけだが、これで「後ろ」という空間名詞を境界領域指示として分類すると「左・右・前・後・上・下・東・西・南・北」なども同じく境界領域指示として分類するしかないからである。さらに、Kim (2006) の分類だと「うしろ」は領域指示ではなくて方向指示として位置づけられているので、方向指示でありながら領域指示の一種である境界領域指示でもあるという矛盾が生じてしまう。

3. 空間名詞「脇」の空間

本節では、位置関係などの空間を表すときに用いられる身体名詞の空間的用法の実例を概観し、身体名詞「脇」の空間的用法が意味拡張において他の身体名詞の拡張用法と比べてどのような違いがあるのかを、山梨 (2000) の説明を中心に考察する。1節でも述べたように、相対的指示枠が中心となっている日本語でも、人間や動物の身体部位を表す言葉を固有的指示枠として用いる場合がある。そし

てそのなかでも身体名詞「脇」はかなり文法化が進んでおり、「バスのお尻に広告が付いている」「富士山の頭に雲の白い筋が見える」のような空間表現に使われる「尻」「頭」などの身体名詞と比べると、その空間的用法が完全に定着しているといえる。言い換えれば、「脇」は「傍・隣・前・後・上・下」などのように独立した空間名詞として認識されている点で、他の身体名詞と大きく異なる。

3.1 身体名詞の意味拡張

ある言葉が本来持っている意味だけではなく、さらに拡張された意味で使われるようになるのは言語の進化においてごく自然なことである。これは身体名詞も例外ではなく、本来は人間の体の特定部位を表す名詞として存在していたのが、徐々に身体部位だけではなくその周辺の領域までを含む意味の言葉として用いられるようになる。このような意味の拡張は人間の認知プロセスと深い関係があるとみられ、山梨 (2000: 101-102) では身体部位に関する表現が拡張された意味を持つようになる理由を、プロファイル・シフトと文法化にかかわる認知プロセスとして説明しており、以下のように身体名詞「目・手・尻・脇」が本来の意味で使われた例と拡張された用法の例をそれぞれ挙げている。

- (1) a. 次郎は交通事故で目を傷つけた。
b. 次郎は喧嘩して目にクマをつくった。
- (2) a. 突然、生徒が手をあげた。
b. 右手には山が、左手には海が見える。
- (3) a. 父が息子の尻をたたいた。
b. あの男は女性の尻ばかり追いかけている。
- (4) a. 彼は相撲で脇を痛めた。
b. 彼はバスタオルを脇に挟んだ。
c. 彼はトラックを脇に止めた。

(山梨2000: 101-102)

例文 (1) ～ (4) の a は身体名詞の本来の用法であり、それぞれ人間の体の特定部位を表している。一方、b の例文はいずれも身体部位そのものではなく、身体部位から至近距離にある空間あるいは身体部位と直接関係のある空間を表しており、本来の用法から拡張された用法であるといえる。そして本稿で扱う「脇」の用法であるが、(4c) の例のように、身体部位の意味からその身体部位周辺の空間、さらに人間の身体部位とは直接関係のないモノの位置関係を表す用法にまで拡張されている。山梨 (2000) では、このような意味拡張はプロファイルされる部分がシフトされた結果であると述べており、特に「脇」においては、最初プロ

ファイルされた部分から隣接する空間領域にシフトし、さらにその直接的空間領域から間接的空間領域にまで拡張された意味で使われていることを指摘している。以上のようなプロファイル・シフトのプロセスを図式化したのが以下の図1である。

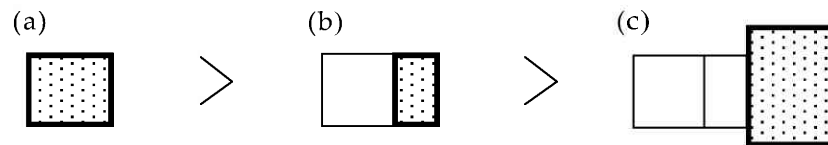


図1：プロファイル・シフトによる意味拡張のプロセス

(山梨2000: 102)

3.2 空間名詞としての「脇」

3.1節で意味拡張による身体名詞の用法について概観したが、上述したように、本稿で扱う「脇」の場合は他の身体名詞とは違って間接的空間領域にまでその意味が拡張され、身体部位以外の物理的空間及びモノの位置関係を表す用法をも獲得している。これは日常会話においても完全に独立した空間名詞として定着しており、1節で述べた「バスのお尻に広告が付いている」「富士山の頭に雲の白い筋が見える」のような表現よりは遥かに文法化が進んでいるといえる。それでは空間名詞としての「脇」はどのような空間的意味を持つのだろうか。通常「Xの脇にYがある」という表現は、「参照点 (R) であるXの中心からずれた至近距離に、ターゲット (T) であるYが存在する」のような解釈ができると思われるが、このような「脇」の空間的解釈は言語表現だけではYの正確な位置を特定できないという問題が存在する。山梨 (2000) では、空間表現としての「脇」の特徴について以下のように述べている。

…「脇」の場合には、主体の身体(ないしは身体部位)を問題とするかわりに、主体の身体以外の物理的な場所ないしは対象物を問題とし、この場所(ないしは対象物)と隣接関係あるいは部分-全体の関係にある空間領域が「脇」によって指示されている。

- (5) a. (&)彼は車を駐車場の脇に止めた。
 b. 知恵子はテーブルの脇に花瓶をのせた。
 c. 男は会場の脇の方に追いやられた。

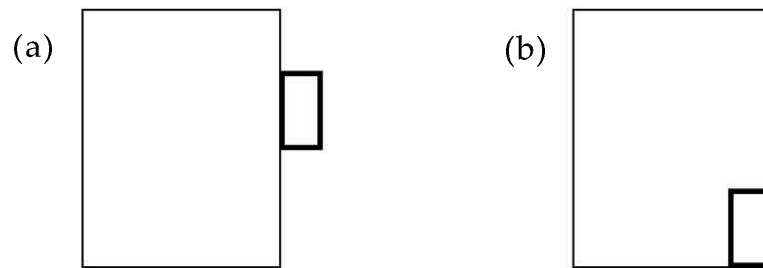


図2：「彼は車を駐車場の脇に止めた」の2つの解釈

…(5a)の「脇」に関しては、2つの解釈が可能である。すなわち、この場合の「脇」は、図2の (a) に示されるように、駐車場に隣接する空間を意味する場合と、(b) に示されるように、駐車場を構成する空間の一部(すなわち、駐車場の片隅)という意味で曖昧である。この後者の解釈は (5b) と (5c) の例に関してもあてはまる。

(山梨2000: 102-103、番号一部修正)

上述した山梨 (2000) の指摘のように、空間名詞「脇」は参照点の外側に隣接する領域を表す場合もあれば、参照点の内側の片隅の領域を表す場合もある。これは対象物が参照点の境界線上をちょうどまたぐようにして存在するという意味ではなく、文脈と捉え方によって内側と外側どちらにも存在し得るということである。4節では、このような意味的違いを生み出す要因はどこにあるのかを、空間名詞としての「脇」が使われている例文を取り上げて考察することにする。

4. 「脇」の空間を定める要素

3節でも述べたように、「脇」が使われている空間表現は、文章だけでは話者が意図した空間を正確かつ完璧に特定するのは難しいと思われる。そこで本稿では、Googleのイメージ検索機能を利用して、文章が「～の脇に」の形に完全に一致し、かつ写真や画像などで話者が捉えた視覚イメージを確認できる例文だけを抽出して分析対象とする。そして「Xの脇に」という言語表現が具体的にどのような空間的状况で使われているのかを確認していく。

4.1 空間名詞「脇」が表す2つの空間領域

- (6) テーブルの脇に—
- (7) 皿の脇に—
- (8) 箱の脇に—

(9) 部屋の脇に—

(10) 体育館の脇に—

(6) から (10) の例はいずれも「脇」が空間名詞として使われた例であるが、それぞれ以下の a と b の例文のように、同じ「Xの脇に—」という表現が使われても、話者の捉え方によっては位置関係の解釈が変わり得る。

(6') a. この日の天気は薄曇り。お茶を飲みながらふとテーブルの脇にあるガスストーブを見ると、この日の天気に合わせてなのか、てるてる坊主が。[外側]

b. 調味料はテーブルの脇にこざれいにまとめられています。[内側]

(7') a. テーブルセッティング。きれいなガラスの皿の脇に置かれたナイフはかわいらしい形をしています。[外側]

b. 酢飯を準備し刺身の半分ほどのシャリを握って、そこに刺身を乗せさらに密着させるように握り、冷蔵庫で十分冷やして出来上がり。皿の脇にわさびを盛ってラップしておくとし臭さが消えて美味しくなります。[内側]

(8') a. 箱の脇にさりげなく会社のロゴが印刷してあってオシャレです(笑)[外側]

b. 新しいウォークマンが届いたんだも〜ん♪さっそく開梱レポ！！で〜す♪♪...ちょっと待ってよお？？あれ？肝心の本体が.....無いぞ無いぞ！どこにもな〜い！！！！なんて思ってたら...箱の脇にへばりついてました。。。[内側]

(9') a. この部屋は少しおかしな作りをしており、部屋の脇に通路があり、そこにトイレや洗面台が設置されています。[外側]

b. 部屋の脇にある茶色のスツールは収納も兼ねています。[内側]

(10') a. 体育館の脇にある桜の木が色鮮やかに咲いています。[外側]

b. じつは、タンブリング抜きでの通しがほとんどで、タンブリングは体育館の脇に敷いてあるマットの上で別にやっている、なんて彼の演技からはどうてい思えない。[内側]

同じ言語表現で位置関係の解釈がどのように変わり得るのかを具体的に見てみると、まず (6'a) は、テーブルが占める領域から少し離れた床に置いてあるガスストーブの位置を表しているのに対し、(6'b) は飲食店のテーブルに置いてある調味料がテーブルの端の部分、つまりテーブルの上の内側に存在することを意味

する。(7'a) は、皿から少し離れた外側に置いてあるナイフの位置を表しているのに対し、(7'b) は刺身が入っている皿の内側の端の部分に寄せられたわさびの位置を表している。(8'a) は、箱の内部ではなく外部の表面に書いてあるロゴの位置を表しており、(8'b) は箱の内部の片隅にへばりついているような状態のウォークマンの位置を表している。(9'a) と (9'b) は、どちらも「部屋の脇」という表現が使われているが、(9'a) は部屋の外を通っている通路の位置を、(9'b) は部屋の中の片隅に置いてあるスツールの位置を表している。そして (10'a) と (10'b) は同じ体育館の脇という表現が使われているが、(10'a) が体育館の外側に立っている桜の木の位置を表しているのに対し、(10'b) は体育館の室内の片隅の空間を表している。

このように、同じ「Xの脇に—」の形で変数 X の値が完全に一致しても同じ空間を表しているとは限らないケースが日本語には数多く存在する。ここで考えられるのは、位置関係を表す言語表現としては同じ対象を参照点にするとしても、その参照点自体の性質は必ずしも同じではない、そして概念化者である話者は性質の異なる参照点を使い分けている可能性があるということである。本稿では、モノの位置関係を認知する能力を参照点構造と関連付け、言語表現は同じでも性質の異なる参照点が存在するという考え方に基づいて分析することにする。

4.2 面的参照点・点的参照点

位置関係に同じ言語表現が使われても参照点の性質が同じであるとは限らないというアプローチに基づき、ここでは空間名詞としての「脇」の分析に「点的参照点」と「面的参照点」という2種類の参照点を区別し、分析を行っていく。まず分析の基盤となる参照点構造というのは、人間の認知能力の1つである参照点を作り出す能力に基づいた認知モデルである。概念化者 (C) である人間はあるモノの存在を把握するとき、そのモノの目印になるようなものを見つけて相対的に把握することになる。これはモノの位置関係を把握するときも同じであり、物理的位置関係においてランドマーク (lm) となるものは、トラジェクター (tr) かターゲット (T) となる対象物の参照点 (R) の役割を担っているといえる。通常の場合、位置関係の参照点となるものとターゲットとなるものの関係は近接関係であることが求められ、その近接関係の領域がターゲットの支配領域であるドミニオン (D) ということになる。このような参照点構造を図式化したのが以下の図3である。

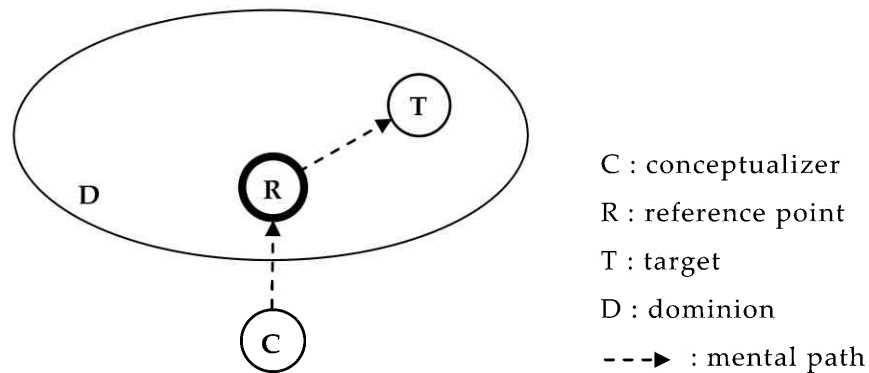


図3：参照点構造

(Langacker 1993: 6)

ここからは以上で概観した参照点構造に基づいて空間名詞「脇」が持つ位置特定の意味性を分析する。4.1節で同じ「脇」という言葉で表現される空間は参照点の内側と外側どちらの解釈にもなると述べたが、これは異なる2つの参照点の種類を区別することで説明できる。例えば、(6'a) と (6'b) の例文はどちらも「テーブルの脇」という表現を用いることによってテーブルを参照点として捉えているが、(6'a) の場合は参照点自体の面積ではなく、参照点そのものを「基点」にして外側へと意識が向いているのに対し、(6'b) の場合は参照点が占める領域、つまり参照点の境界線から「内側の面」の方へ意識が向いていて、その面の中心からずれた端の空間が想起されるといえる。言い換えれば、両方の参照点は言語表現としては全く同じであり、その違いが形式の違いとして表に出ることはないが、前者の参照点は、いわば参照点そのものが基点となって参照点の外側に空間のドミニオンが形成される「点的参照点」であり、後者は参照点自体の面積が想起され、参照点の内側に空間のドミニオンが形成される「面的参照点」の性質をもっていることになる。

したがって、両者が示している空間領域はそれぞれ別のものになり、たとえ同じ参照点を用いてモノの位置関係を言語化しても、概念化者が参照点をどのように捉えているかによってその空間的意味も変わってくる。このような内容を踏まえて、性質の異なる「点的参照点」と「面的参照点」を図式化したのが以下の図4である。

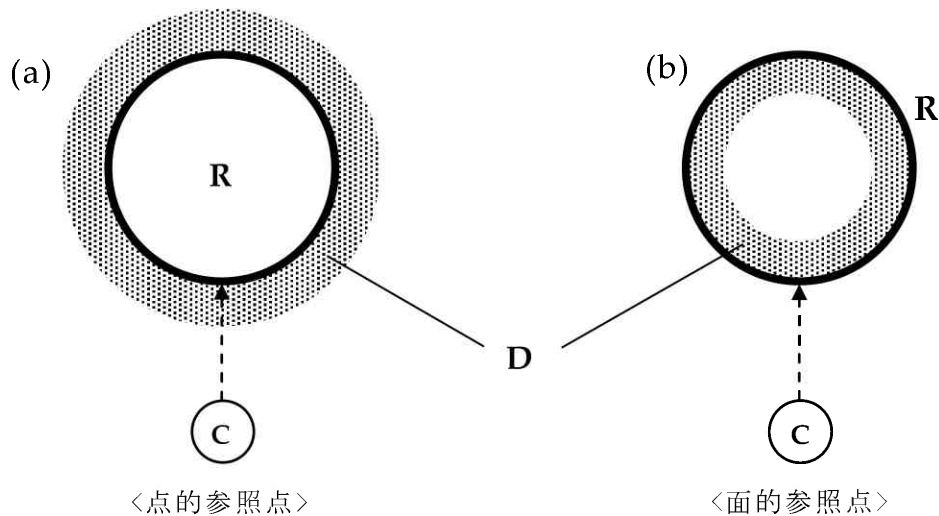


図4：「点的参照点」と「面的参照点」の空間的ドミニオンの違い

図4を参照点構造に照らし合わせて説明すると、まず概念化者 (C) である話者がターゲット (T) である対象物の相対的位置を表すために参照点 (R) への心的アクセスを行う。そしてアクセスした参照点の性質によって、展開されるドミニオン (D) が変わることになる。つまり参照点そのものが基点となる「点的参照点」の場合は、参照点から外側に向けて意識が広がり、参照点の外側の至近距離領域が対象物が存在し得る空間領域 (D) として展開される。また参照点自体の面積に意識が向けられる「面的参照点」の場合は、参照点の内側の面の中心となる部分からずれた端の領域が対象物の存在し得る空間領域 (D) として展開されることになる。このような空間名詞「脇」における参照点の使い分けは、言語表現としては同じ参照点をとるとしても、話者が参照点をどのように捉えているのかによって展開されるドミニオン、つまり対象物が存在し得る空間が変わることを意味し、「脇」で表現される空間の曖昧性が生じる要因であるといえる。このような使い分けによる解釈の違いは、以下の (11) と (12) のような例からも裏付けられる。

- (11) a. 駐車場の脇に車を止めた。
 b. 広い駐車場の脇に車を止めた。
 c. 車20台分の駐車場の脇に車を止めた。

- (12) a. テーブルの脇に箱を置いた。

- b. 広いテーブルの脇に箱を置いた。
- c. ものが散乱しているテーブルの脇に箱を置いた。

(11) a~c の例文はどちらも「駐車場の脇に車を止めた」という意味であることは同じであるが、それぞれ駐車場の外側に車を止めたのか、それとも内側の片隅に車を止めたのかという判断においてはかなり違いが見られる。(11a) は「駐車場の脇に車を止めた」という情報しか与えられていないのに対し、(11b) と (11c) の場合は「駐車場の脇に車を止めた」という情報に、参照点である駐車場の面積を際立たせる「広い」「車20台分の」という言葉が一緒に使われている。このように参照点の面積を際立たせる追加情報、つまり面積のフレームを起動させる言語表現は、聞き手側にとって点的参照点よりは面的参照点を起動させやすくするため、空間の解釈においても参照点の内側の空間を想起しやすくなる。(12) の例も同じで、「テーブルの脇に箱を置いた」という表現はテーブルの横の近いところに箱を置いたという解釈もできれば、テーブルの上の端の部分に箱を置いたという解釈もできる。しかし (12b) と (12c) の「広い」「ものが散乱している」のように参照点の面を意識させる言語表現が加わると、箱が置いてある場所はテーブルの上の端、つまりテーブルの内側領域という解釈が優勢になる。このような事実は、参照点の面積を際立たせる要因が存在する場合は面的参照点が起動されやすくなり、結果的に対象物の位置の特定においても内側領域の解釈になりやすいことを意味する。

4.3 面的参照点の捉え方が難しい場合

4.2節で異なる2種類の参照点に対応して「脇」によって展開される空間の性質も異なると述べたが、話者によって選択される参照点の全てが均等に2種類の参照点を起動させるとは限らない。一般的に参照点は基点としての参照点、つまり1つの塊として認識される点的参照点の方が起動されやすく、文脈と対象物の情報を排除した「Xの脇に一」という形のみの場合、面的参照点よりは点的参照点による外部空間の解釈の方が優先される傾向が強いと思われる。

また参照点の相対的形態においても空間的意味の解釈に偏りが見られる。話者が対象物の位置関係を表すときに用いる参照点は現実世界の中で様々な形で存在し得るが、中には実際は人間にとって十分な面積を持っていながらも、概念化者にその面的特徴を感じさせにくいものも存在する。例えば「京都タワー」「スカイツリー」「五重塔」などのものは、その高さ（あるいは長さ）だけが際立って認識される典型的な例であり、たとえ京都タワーに数十人が入れる十分な空間が存在するとしても、「京都タワーの脇」が京都タワーの内部空間を表すことはほとんどない。また家や学校やホテルなど、内部構造が比較的複雑な構造物の場合

も内部空間の解釈が難しくなる。これは内部構造が用途によって細かく分けられており、その内部の身近な名称（例えば部屋、教室、通路、ロビーなど）の方がより参照点として選択されやすいからであると思われる。このような分析は、同じ建物でも内部構造が比較的単純で広さが際立って認識される体育館などは内部空間の解釈も可能なことから裏付けられる。

5. 結論と今後の課題

本稿では意味拡張による身体名詞「脇」の空間的用法の例を取り上げながら、性質の異なる2つの参照点、すなわち「点的参照点」と「面的参照点」の違いによって生じる空間的意味の曖昧性について考察した。これはモノの空間的位置関係を表すのに全く同じ言語表現が使われているとしても、話者がその空間をどのように捉えているのか、つまり概念化者が参照点をどのように捉えているのか（使っているのか）によって指し示す空間が変わり得るということを意味する。

このような概念化者による2種類の参照点の使い分けは「脇」に限られた問題ではなく、「前・後」や「左・右」などのような他の空間名詞の解釈にも同じく存在すると思われる。たとえば、以下の (13a) と (13b) の例文の場合は、どちらも「バスの後ろ」という同じ表現が使われているが、(13a) はバスの内側の後ろという意味で使われているのに対し、(13b) はバスの外側の後ろという意味で使われている。

- (13) a. 現地まではものすごいでこぼこ道なので、うっかりバスの後ろに座ってしまった人(=私)は、体がバウンドしっぱなしの状態に。[内側]
 b. ミッキーバスの後ろにしっぽがついてるの知ってる？[外側]

今後の課題としては、上述した参照点が空間名詞全般に普遍的に適応できる概念なのか、それとも一部の空間名詞に限られた問題なのかを明らかにすること、そして空間名詞「脇」が表す空間を左右する参照点以外の要素を明らかにすることである。「脇」の空間的意味を、単なる「モノのかたわら・そば」や「中心からはずれた場所」など、従来の辞書のように素朴に定義していくのは無理がある。実際「脇」で表現される空間は、より複雑ないくつかの制約があるように思われ、これは「脇」の空間的意味に直結する要因であると考えられる。

まず考えられる要因は、参照点とターゲットの形である。空間名詞「脇」が身体名詞から拡張されて空間的意味を持つようになったことを考えると必然であると言えるが、人間の体のなかで脇が占める解剖学的位置から考えると、「正面と背面の方向が占める部分を除く左右方向の部分」といったような物理的特徴が導き出される。概念化者は参照点になるモノの特定の部分を正面あるいは背面であ

ると認識して（たとえ実際は正面・背面がないモノであるとしても）左右方向を捉えることになり、「脇」の表す空間も限定されるというわけである。日本語母語話者がモノとその位置関係の前後左右を決めるときに考慮する要素は、概念化者の視線、概念化者・参照点・ターゲットの位置関係、参照点とターゲットの進行方向などと様々であるが、「より正面・背面があるように見える形をしている参照点」の方が、そうではない参照点より「脇」の空間を特定・限定しやすい、ということである。

2つ目の要因は、参照点とターゲットの物理的距離である。点的参照点による解釈の場合、ターゲットの位置は参照点のそば・かたわらと言えるぐらいの至近距離でなければならず、また面的参照点による解釈の場合でもターゲットが参照点の枠（境界線）からどれぐらい離れているのか、言い換えればターゲットが参照点の中心からどれぐらい離れているのかという問題が大きく関わってくる。モノの位置関係を言語化するとき参照点として設定されるものはターゲットを特定できる距離に存在しなければならないという事実は「脇」に限られた問題ではない。たとえば、京都大学の時計台の位置を説明するのに「京都大学の時計台は広島駅ビルの東にあります」といった表現はあまり意味がない。身体由来の特徴を持つ「脇」に関しては、他の空間名詞と比べてもかなりの至近距離が求められると考えられる。

3つ目の要因は、参照点におけるターゲットの大きさ（比率）が挙げられる。「脇」は身体名詞由来の空間名詞であるため、参照点より大きい対象物はターゲットとして認められない。しかしターゲットが参照点より少しでも小さければよいというわけでもなく、その大きさにある程度の差があることが求められる。これは「バスの脇に大型トラックがある」より「バスの脇に自転車がある」の方が容認度が上がるという事実からも裏付けられる。

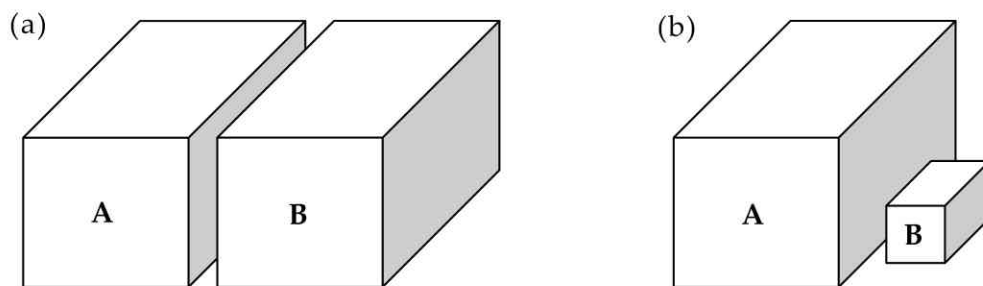


図5：参照点とターゲットの比率による「Aの脇にBがある」の容認度の違い

4つ目の要因は、参照点とターゲット以外の周辺要素の変化（環境）である。参照点となるモノとターゲットとなるモノの物理的位置関係が全く変わらないとしても、これら以外の周辺要素の変化によって「脇」の空間は大きく影響を受けられると思われる。例えば、以下の図6の (a) は「テーブルの脇にコーヒーが置いてある」と表現することができるのだが、(b) のようにテーブルの周りに人が座ったり、人がテーブルの特定の部分を使用したりすると、たちまち「テーブルの脇」という言語表現の容認度は下がってしまう。このような事実は、参照点とターゲット両者の物理的位置関係は全く変わっていなくても、その周辺要素の変化によっては「脇」で表せる空間が制限される場合があることを示唆する。



図6：周辺要素の変化による「テーブルの脇のコーヒー」の容認度の違い

最後に「脇」の空間を決める要因としては、参照点とターゲット、そして両者と述語（動詞）の関係から想起される百科事典的知識が挙げられる。まず参照点とターゲットの関係であるが、ターゲットが変数となる「テーブルの脇にXがある」という表現の場合、ターゲットによって選択される参照点の種類に影響がある。変数Xに「コップ」という単語が入る場合は、通常は面的参照点での解釈が優勢となり、コップはテーブルが占める内部領域、つまりテーブルの上の片隅という解釈になる。しかし変数Xに「箱」が入る場合はどちらの解釈が優勢とは言えず、文脈と話者の捉え方で解釈は変わり得る。そして変数Xに「灯油ストーブ」という単語が入る場合は、通常は点的参照点での解釈が優勢となり、灯油ストーブはテーブルから少しだけ離れている至近距離の空間に存在するという解釈になる。このような事実は、概念化者がテーブルとコップあるいはテーブルと灯油ストーブの関係から起動されるフレームの百科事典的知識に基づいて物事を解釈するためであると考えられる。また参照点・ターゲットと述語の関係であるが、述語が変数となる「テーブルの脇に箱を一」という表現では、後ろに続く動詞に

よって起動される参照点の種類が変わり得る。述語として「置く」が入る場合は上述したようにテーブルの上・テーブルのそばどちらの解釈もあり得るが、「乗せる」が述語として入る場合は面的参照点での解釈となり、箱はテーブルの上の片隅に置かれることになる。

以上で「脇」の空間に影響を与える要因をいくつか簡単に述べたが、実際には以上で挙げた以外の要因も存在する可能性がある。各々の要因に関して正確かつ詳細な分析を加えることや他に存在し得る要因の検討を行うことは、空間名詞における参照点の使い分けに関する普遍性の有無の問題と共に今後の課題とする。

参考文献

- 深田智・仲本康一郎. 2008. 『概念化と意味の世界』東京：研究社.
- 井上京子. 1998. 『もし「右」や「左」がなかったら』東京：大修館書店.
- 今井むつみ. 2010. 『ことばと思考』東京：岩波書店.
- Kim, Sung-Gyeong. 2006. Classification of Japanese Spatial Nouns. *Foreign Languages Education* 13(2): 477-487. (金聖京. 2006. 「日本語空間名詞の分類：参照点との位置関係を中心に」『*Foreign Languages Education*』13(2): 477-487.)
- 久島茂. 2002. 『《物》と《場所》の意味論』東京：くろしお出版.
- Langacker, Ronald W. 1993. Reference-point Constructions. *Cognitive Linguistics* 4: 1-38.
- Levinson, Stephen C. 1996. Language and Space. *Annual Review of Anthropology* 25: 353-382.
- 田中茂範・松本曜. 1997. 『空間と移動の表現』東京：研究社.
- 徳永健伸・小山智史・齋藤豪. 2004. 「日本語空間名詞の分類」『情報処理学会研究報告. 自然言語処理研究会報告』108: 135-140
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京：くろしお出版.